

を置いた縦、横、斜めなどの概念や定位を学習させることが大切である。

第2節 触覚による弁別学習

前節の初期的な手の運動の学習によって、手を伸ばす、探す、人や事物に触る、比べる、確かめるといった行動が盛んに起こるようになる。このような行動により外界からの刺激を受容して自主的、能動的に外界へ働きかけることが可能となる。このような自主的活動において、触覚はもとより聴覚や味覚、嗅覚などを活用して多くの事物を弁別し、日常生活や遊びの中で事物の存在や状態を意味付け、理解することができるようになる。属性の弁別については、日常生活や遊びの他に系統的な教材を使いながら学びを促すことが大切である。

ここでは、学びの基盤づくりとしての事物の弁別、事物の属性（大きさ、長さ、太さ、厚さ、重さ、硬さなど）の弁別について述べることにする。

1 身辺の事物の弁別

ここでは、事物の特徴を捉えて区別することと、その事物の名称や用途などの観点で区別することについて述べる。

〈ねらい〉

身の回りにあるものを、盲幼児児童が自主的に触れ、観察することを通して弁別すること促す。また、それらの事物とその名称や用途などを結び付ける。

〈内容〉

身の回りにあるいろいろなものを識別したり、そのものの用途や名前を言い当てたりする。いろいろな観点での「同じと違う」の判別をする。身の回りにあるものとして、次のようなものを挙げるができる。

(1) 「食器類」

スプーン、フォーク、皿、コップ、茶わん、はし、水筒など

(2) 「衣類」

ズボン、スカート、シャツ、セーター、パンツ、靴下、靴、ベルト、帽子、タオル、寝具類など

(3) 「玩具類」

人形、自動車、ボール、ブロックなど

(4) 「日常使う物」

はさみ、歯ブラシ、くし、ハンカチ、タオル、カバンなど

(5) その他

食べ物、楽器、家具

これらのものを1種類ずつ、自主的に触ることを促す。盲幼児児童は何であるかを当てる。次に複数の種類のものの弁別をする。弁別するときには、次のような三つの方法を用いて学びを展開する。

ア 選択法

この方法は、例えば、コップとスプーンを弁別する場合、まず、選択箱の左右にコップとスプーンを置き、それぞれの手を同時にコップとスプーンの上ののせ「コップを下さい。」「スプーンを下さい。」と指示して弁別させる。

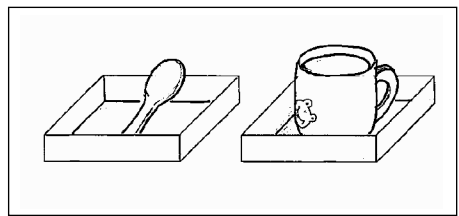


図 3-15

イ 見本合わせ法

この方法は、まず見本箱（手前真ん中）のスプーンを初めに触り、次に選択箱（向こうの肩幅の左右）のコップとスプーンの上にそれぞれの手をのせ、見本と同じスプーンを選択して見本箱に入れる。さらに、コップとスプーンを左右入れ替えて見本と同じものを弁別・選択する。最後に任意に見本の実物を取り替えても弁別できるようにする。

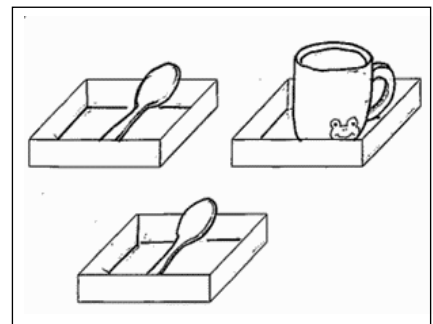


図 3-16

ウ 分類法

この方法は、実物を単に一つ一つ弁別するのではなく、弁別を通して実物の仲間づくり（集合）をする方

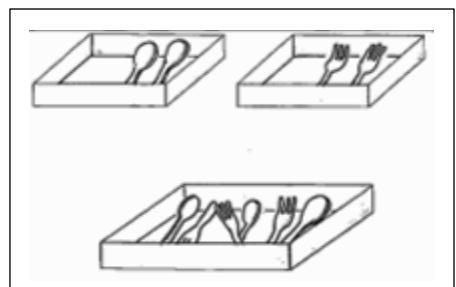


図 3-17

法である。例えば、フォークとスプーンがいくつか入った見本箱を用意し、フォークとスプーンに分けて、それぞれの箱に分類して入れるという方法である。

【留意事項】

- ・実物については、日常生活でよく使われる物や身近にある物、両手に収まる物がよい。学習としてではなく、普段から周囲にある物を触れるよう促すことが大切である。
- ・初めは、弁別の手掛かりとしては触覚的な違いがはっきりした物を選んで弁別させるようにする。例えば、茶わんと汁わんよりも、茶わんとスプーンの方が弁別をしやすいが、それでも難しい場合には、茶わんとタオルという具合に、違いの差が大きいものを提示する。
- ・自主的に両手を使って十分に触察をして弁別できるようにすることが大切である。
- ・見本や選択肢に手を導くときには盲幼児児童の手を上からつかむのではなく、腕や手首をすくい上げるようにして導くようにする。
- ・分類の学習は、単純な分類から段階的に高度な分類へと進める。例えば、2種類の弁別ができるようになってきたら選択群を2種類から3種類へと広げたり、マグカップと湯呑み茶碗、スプーンとフォークのように似ている物を分類したり、「飲むために使うもの」など用途で分類したりする課題を与えていくようにする。また、無理のない範囲で、盲幼児児童が違いや仲間集めの観点などを表現する機会を作るとよい。

2 属性の弁別

事物にはすべて形や大きさ、長さ、太さ、厚さ、重さ、硬さなどの属性がある。ここでは、それらを区別することを通して概念形成の基礎的な能力を身に付けることについて述べる。

〈ねらい〉

基本的な属性の弁別をする活動を通して、触覚や触運動感覚を中心とする感覚の統制を図り、事物・事象などの概念形成の基礎的な能力を身に付けることを促す。

〈内容〉

「大きさの弁別」

- ・大きい円のピースと小さい円のピースを使って大小を弁別する。大小2種類の型はめを提示し、円のピースや型枠を自分で探索し、操作して入れる。触察での弁別ができるようになったときに「大きい、小さい」の言葉を添えるようにする。
- ・大小2種類の円のピースを提示し、「大きい丸を下さい。」、「今度は、小さい丸を下さい。」などと指示されたものを弁別する。
- ・大小の弁別ができるようになったら、大中小の3種類のピースを用意し、それぞれの大小を弁別したり、小さい順、大きい順に並べ変えたり、大きい順に下から積み上げていったりしてもよい。
- ・形を変えて三角形や四角形の板を使っても行う。

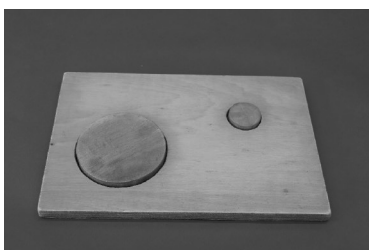


図 3-18

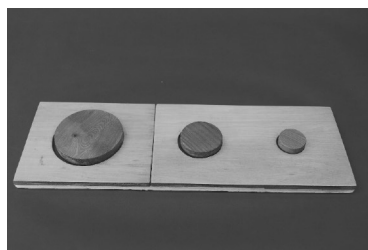


図 3-19

「長さの弁別」

大小の弁別と同じように操作での弁別ができるようになってから言葉を添える。長い棒や短い棒を使って、長短を弁別する。長短2種類の棒を提示し、「長い棒を下さい。」、「今度は、短い棒を下さい。」などと指示して弁別させる。また、長短の弁別ができるようになったら、長い棒、中ぐらいの長さの棒、短い棒の3種類を用意し、それぞれの長短を弁別したり、短い順、長い順に並べ変えたりする。さらに、棒の端をそろえて立てて比較することを教えるとよい。

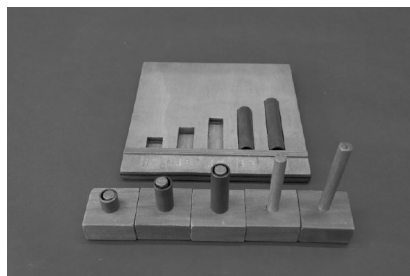


図 3-20

「太さの弁別」

太い円柱や筒（径 20mm 程度）と細い円柱や筒（径 10mm 程度）を用

意し、それぞれの太さに合う穴に入れる。二つの太さの弁別ができるようになったら、太さの異なる3種類の円柱を用意し、同様に弁別し穴に入れるようにする。

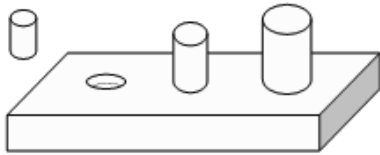


図 3-21

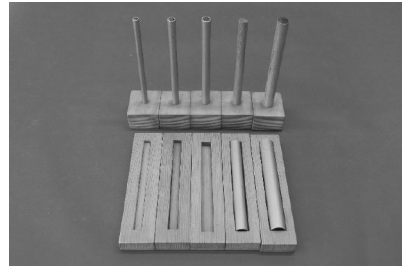


図 3-22

「厚さの弁別」

厚さの異なる2～3種類の板を用意し、「厚い板」、「薄い板」の弁別の学習をする。弁別は、手で持ったり、親指と人差し指で挟んだりして触覚的に弁別したり、同一平面に板を並べてその高低を比べたりする。

「重さの弁別」

同じ入れ物を数個用意し、その中にそれぞれの重さが変わるように物を入れる。持った感じが同じで重さだけ異なる教材を左右それぞれの手で持って「重い」、「軽い」を弁別する。

「硬さの弁別」

硬さの異なる粘土などを提示して「硬い」、「柔らかい」違いを指先を使って弁別する。

「粒の大きさと種類の弁別」

ア 穀物の弁別

大豆、小豆、米、ごまなどの粒の大きさと種類を弁別する。

イ ビーズ玉の弁別

大5mm程度から小1mm程度の直径の異なった数種類のビーズ玉の粒の大きさを弁別する。

ウ 砂粒の大きさの弁別

砂遊びなどの活動の中で、粒の大きさの違いを意識するよう促す。

「表面の粗滑（そかつ）の弁別」

サンドペーパーとつるつるした紙を、貼り付けたものをそれぞれ二つずつ作り、違いを弁別する。次に、粗さの違う3種類のサンドペーパーを貼り付けた物をそれぞれ二つずつ作り、見本合わせをしたり、目の粗い順に並べたりする。

【留意事項】

- ・初めは、生活の中で触り心地の良いものとそうでないものの違いや、ベタベタなどの触り心地のものに触れるなど感触の違いを意識するよう促す。
- ・弁別をさせる場合は、初めからいくつも提示せずに、まず、二つを比較させて、それぞれの属性について理解ができたなら、徐々に弁別させる物の数を増やしていくようにする。
- ・大きさや長さ、太さなどの弁別では、型はめを使うと盲幼児児童が自分で正誤を確認することができる。
- ・興味のある盲幼児児童には、2～3段階だけでなく、相対的な量の弁別につながる4段階を入れるとよい。（本章第3節3）。
- ・長さは立てる、横にする教材などを使うことで長さとの高さの関係の学びを促すことができる。
- ・属性については、教材を使ってそれぞれの属性の弁別をする他に、日常生活や遊びの中でも身の回りの事物に触れるときに属性を意識し比較や弁別をすることを促すことが望ましい。
- ・初めは、差が大きく十分に判別のつく物から始め、徐々に差が少ない物へと移行して提示するようにする。
- ・大きさについては、ここで例示した物のほかに、2～3枚の皿や数種類の瓶、缶などの身の回りにある物での弁別を試みるようにするとよい。
- ・長さについては、棒のほかに、糸やひもなどを使って弁別させるのもよい。
- ・太さについては、他の円柱（棒）やひもを使って弁別させるのもよい。
- ・厚さについては、本等を使って弁別させるのもよい。
- ・重さについては、同じ大きさの瓶や缶などを工夫して重さを変えて弁別させるのもよい。

- ・硬さについてはボールなどを使って弁別させるのもよい。

第3節 図形の弁別、分解・構成の学習

点字学習では、身体座標軸や空間を捉える基準や枠組みを手がかりにすること、図形を分解したり組み立てたりすることのできる操作技能が必要となる。前節までの学習によって、触覚を中心に、事物が何であるかを弁別すること、大きさ、長さなどの事物の属性について弁別することを行ってきた。

ここでは、それらを更に発展させて属性の中でも最も基本的なものである図形の弁別学習を取り上げる。さらに、これらの図形の弁別学習を通して、空間を構成する要素を学習したり、位置付け、方向付け、順序付けなどの空間関係を学習したりする方法も取り上げることにする。

ここでの学習は位置の学習や点字の読み書きの学習などと並行して行う場合もある内容である。

1 図形弁別の基礎

ここでは、数を数えること、基準を決めて操作すること、方向概念の基礎について述べる。なお、形、位置、方向を学ぶときに基準を明確にすることが必要になるため、机に向かって体が正面になるようにまっすぐ座ることが大切である。

(1) 物を動かしながら数える

〈ねらい〉

物を動かしながら数を数えることを促す。

〈内容〉

玉そろばんやブロックなどを動かしながら数を数える。

【留意事項】

- ・ 3個からはじめ、できるようになったら5、10個と数を増やす。
- ・ 10を数えるときには、動きが一方向に動く玉そろばん、入れ物から入れ物、右から左へ動かしながら等、いろいろな数え方をするとよい。
- ・ 生活や遊びの中で数を数える機会を多く持たせることが望ましい。